
僕と紗江ちゃんであららぶキャンプ！

まなつか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕と紗江ちゃんであらぶらぶキャンプ！

【Nコード】

N7174X

【作者名】

まなつか

【あらすじ】

祝 アマガミSS二期！ を記念して書いた「僕と逢との一泊二日」とは別の小説です。紗江ちゃんをヒロインとして迎えたこの作品はやはり前作同様「お泊まり」というところです。さてさて、偉大なる「橘さん」は山でなにをしてくれるのであろうか？

第1話「始まり」

「ん〜っ、やっぱり空気が違うね」

僕は大きな伸びをしながら隣にいる紗江ちゃんに言う。

「そうですね……あつ、先輩！ 小鳥さんたちがたくさん……」

僕は紗江ちゃんの指さした方向をみる。小鳥がたくさん山の方へと向かって行っていた。

「本当だ、たくさんいるね」

「いいなあ……私も空が自由に飛べたらいいのに……」

「紗江ちゃんなら飛べるさ！」

「えっ……そんな……でも、飛べそうな感じがしますね」

はははっ、冗談を本気にするなんてかわいいなあ。

僕と紗江ちゃんは輝日東山にキャンプに来た。あのクリスマスから半年。そう、あれは二週間ほど前のことだった。

2

「先輩……あの、今度遠足があるんですけど……」

「あ、ああ、僕も去年行ったな……。輝日南山だっけ」

「は、はい。そうなんですけど……あの、私体力がなくなってみんなに迷惑をかけないか心配で……」

「あ、それなら」

ん、待て。輝日南山は結構緩やかでルートは短いはずだ。これは美也からも聞いているから紗江ちゃんも知っているはず。それなのになんで僕に相談なんて……？

「先輩……？」

いや、これはただ相談しているんじゃない。僕　つまり、教官に特訓をしてくださいと言っているようなものじゃないか！

「紗江ちゃん！」

僕は紗江ちゃんの肩をがしつと掴んだ。

「は、はい！」

「一緒にキャンプに行こう！」

「は、はい……?!」

驚いた表情を見せる。あれ……違ったかな。

「一緒に特訓しよう！」

「えーっと……え？ わ、私と先輩とで泊まりでキャンプするんですか？」

「そうだよ！」

「ええええー！？ と、泊まり……泊まり……泊まり……」

紗江ちゃんは口の中でずっと「泊まり……」とつぶやいている。

「……わ、かりました。お父さんとお母さんに訊いてからにします」

「よし、決まりだ！」

とその後いろいろなあつて今に至る。

キャンプの用具は梅原のお兄さんから借りてきた。

「さあ、行くぞ紗江ちゃん！」

「はい！ 教官！」

僕たちは青空に向かって拳を突き上げた。

第1話「始まり」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

また新たに連載小説に手を出してしまいました……更新がきつい……。

受験生ですので、おそらく更新は週に一回。水曜日の午前0時になるかと思えます。

塾の帰りに執筆をしていますので。

僕はどちらかという巨乳ではなく、貧乳派です。

最高です。冗談です。

いいんですよ、胸なんて。可愛けりゃいいんですよ。

さーえちーん

それでは。

第2話「先輩、トイレ行きたいです」

「紗江ちゃん、見てよ」

「わぁ……すごいです。こんなにも落ち葉が積もってますねー」

山のふもとに一歩足を踏み入れると落ち葉でいっぱいだった。

普段街の方で暮らしている僕たちにとってそれはすごいことだった。一歩歩くごとにサクサクという感触がなんともいえない。

「大丈夫？ 鞆、重くない？」

「は、はい。大丈夫です」

紗江ちゃんのリュックサックには二日分の食料が入っている。缶詰をはじめ、米やお菓子なども入っている。ちなみに僕の鞆にはテントや飯ごう炊さんの道具、そのほかいろいろ入っている。正直かなりきつい。

「それじゃあ、行こうか」

「はい」

そしてしばらく歩く。景色はあまり変わらず綺麗な赤や黄色の葉が風によってちらちらと舞っていた。

「先輩……あの……」

「ん？」

紗江ちゃんが顔を赤らめてもじもじしている。

「その……えっと……」

「どうしたの？」

「と、トイレが……したいです」

「ええっ!?!」

や、山で！ ト・イ・レ!?!

「で、ですから……その……ちょっと失礼します!」

「あぁっ!」

紗江ちゃんはほいとリュックサックを放り投げると道からはずれ

た方へと行ってしまった。

「なんてことだ……」

聞こえるぞ。

き、こ、え、る……！

「聞かないでくださあぁあぁい！！！！」

よほど我慢していたようだ。

至福？ の一時を過ごせた。 ははっ、いいじゃないか！ ハイキ

ング最高！

僕は木々の隙間から見える蒼い空を仰ぎながら一人、にやついていた。

第2話「先輩、トイレ行きたいです」(後書き)

こんにちは。まなつかです。

なんか最近めっちゃ疲れてますん。

更新速度は相変わらず週一回で行かせていただきます。
それでは。

第3話「紗江ちゃん、やましいことを」

「さあ、行くところか」

「はい……」

紗江ちゃんは流石に先ほどのことで頬をさくらんぼのように赤く染めていた。

「ところで先輩」

「ん？」

「目的地はどこなんですか？」

「ああ、それね。どっか泊まれそうなところがあったらそこでキャンプをする予定」

「だ、大丈夫なんですか？」

「はははっ！ 大丈夫大丈夫！ ほら、僕の友達の梅原」

その梅原という言葉を聞いたとたん彼女はさらに顔を赤くした。

……なにを想像しているのだろうか。

「あいつが昔この山でキャンプをしたことがあるそうだよ」

「だ、誰とですか！？」

「え……いや、梅原のお兄さんだったさ……」

言ってからしまったと後悔する。

彼女は完全に自分の世界に入ってしまったからだ。

「やや、そういうやましいことはなくってさ……ふつう」

「なにを言っているんですか！ 私は何もやらしいことなんてこれっぽっちも考えていませんよ！」

「ご、ごめんよ……」

「あ、すみません……私の方こそ」

「……」

「……」

しばし気持ちの悪い沈黙の時間が流れる。お互い何か雰囲気をも

るくしよつと辺りを見回すが

「「あ」「」

二人の声が重なる。

視線も同じところに向いていた。

第3話「紗江ちゃん、やましいことを」(ry) (後書き)

こんにちは、まなつかです。

今日学校で置き勉チェックがあるのを知っていたにも関わらず、
重いので置き勉をしてきてしまいました。最悪です。眠れません。
学校の教科書って正直役にたたない(r y)
うちの県だけかもしれないね。

まあでも30冊近くはちょっと多いですね。限度っていつもの
があります。

…………… ああ、心配だ。

小心者なのでそれでは。

第4話「熊だ」(前書き)

更新が数時間遅れました。すいません。

第4話「熊だ」

「熊……だよな」

僕は自分でも驚くくらいのふるえた声で隣でそれ以上に震えている紗江ちゃんに言う。

「そそそそつですよな」

一瞬紗江ちゃんを確認すると顔が真っ青だった。

「どどどど、どつしよう!」

やつぱりこの季節、熊が多く出没するよな。どつしよう、やばい。やばすぎる。

「死んだ振りですよ!」

「そつだ! それだ!」

僕はキャンプ用のナイフを取り出す。そして思い切り腹に刺そうとして……。

あれ。

「先輩! 死んじゃいやです!」

「うっわわ」

どつしよう、気が動転して自分でも訳の分からないことを! 落ち着け……。

梅原はなんて言っていたか……思い出せ。

『あ、もし熊が出たら何が何でも彼女を守ってやれよ。命に代えてでも』

わかった。具体性は無いが今の僕には十分だ。

熊の餌食になる

おとりになる

熊より先に紗江ちゃんを襲う

「くーまさーんこーちらー!」

そう叫んで紗江ちゃんを突き飛ばし、走り出す。紗江ちゃんは驚いて動けないはずだ。

「こーつちにおーいで!」

挑発するように服を脱ぐ。すぐに反応してこっちに走ってきた。

……速いぞ。

「こーつちだよーん」

山を縦横無尽に駆け巡る……予定だったが

「伏せろ!」

誰かの叫び声がして銃声が響きわたる。僕はとっさに転ぶように伏せた。

訪れる静寂。鳥さえもすべて時間が止まったように静かになった。

「大丈夫か!？」

第5話「危機一髪」

「大丈夫か!？」

それは男の声だった。僕はかなりの数の衣類を脱いでいたので体中擦り傷だらけでひりひり痛かった。

「せーんぱーい!」

紗江ちゃんの震えた声が聞こえる。そして枯れ葉をかさかさと踏む音がして

「先輩!」「た、橘!」

二人の声が重なった。

僕はむくりと顔だけ起こす。

「梅原のお兄さん!」

「久しぶりだな。はは、まさか熊におっかけられているとはな。:

…この子はカノジョかい?」

「ええ、そうです」

「守ってやろうとしてたんだな」

「はい!」

「先輩!」

突然柔らかい感じと共に身体が軽くなる。紗江ちゃんが起こしてくれたのだ。

「よかったです、無事で……」

「ありがとうございます」

僕らはそっと口づけをした。

「お、お、俺は! 何もみてないからな! そ、そんなじゃこの熊はもらっててくから! じゃ、じゃあなあ」

「はい! ありがとうございます!」

「おう、またな!」

彼は銃を担ぐと帰って行った。猟でもしているのだろうか。

「先輩、私のためにありがとうございました」

「はははっ、ちょっとかつこわるかったけどね」

「そんなことないです!」

「ありがとう、紗江」

ぎゅっと抱きしめる。紗江の温もりが

僕は服を着ていないことに気づき、急いで集めてきた。

「さあ！ 頂上目指してひと頑張りだ！ 行くぞ!」

「はい!」

今度はしっかりと手を握ってはぐれないようにした。

顔を見合わせてにっこりと彼女は笑った。

第5話「危機一髪」(後書き)

感想などありましたらどうぞお気軽に。

第6話「山頂にて」

山の空気がやっぱり変わってる。

そう思っているのは僕だけではない、隣にいる大切な人もおもっていると思うと嬉しさが増した。

「紗江ちゃ」

「おなか減っちゃいましたね」

「へっ!？」

心は通じなかったようだ。

「あ、まだ減っていませんか？ でもでももうお昼ですし……」
時計を見ると午後2時だった。なんやかんやでこんなに時が経っていたとは。

「そうだね、お昼にしようか」

「はい!」

適当な場所を探すとすぐ近くに岩があった。二人くらい座れそうな岩だ。

「ここで食べよう」

座ってみると目の前に広がった景色に思わず息を吞んでしまった。

いつもの風景。同じ場所。あのファミレス、海、学校……

何もかもが違って見える。

輝いて見える!

「わぁ……素敵な場所ですね」

やっとわかってくれた!

「鳥さんになった気分です」

「そうだよ。これだけ高いと輝日東が全部見渡せちゃうよ」

吹いてくる風が心地良い。
耳を澄ますと後方から美しい鳥の鳴き声。
落ち葉がひらひらと舞っている。

「せーんぱい、食べましょう?」

隣には柔らかな笑顔を浮かべている一人の少女。

「そうだね、食べようか」

僕は紗江ちゃんが作ってくれたサンドイッチを食べる。いろいろあつたために潰れてしまっていたがそこに込められた愛情は変わらない。

「私を作ったんです」

「うん! おいしいよ!」

僕は急にお腹が減ってきて無我夢中にそれを胃袋の中へと放り込む。

「先輩、マヨネーズ、ついてますよ」

「えっ!? 本当!? どこどこ?」

あわてて顔を拭おうとしたその時、紗江ちゃんがぐっつと顔を近づけ

「ここでしたよ」

「え……」

な、なんなんだあの「ちろっ」っていう擬音が最もよく似合うよ
うなああの感触は! そして頬に感じたあのなんとも言えないざらっ
とした感触、温かさ!

「さ、紗江ちゃん!」

「えへへ……一度やってみたかったです。本当はついていません
でした」

可愛らしくほほえむ。

心の中がほわっと温かい感じに包まれた。

僕は、今！ 幸せだ！

ここから輝日東に向かって思い切り叫びたいような気分だった。

第6話「山頂にて」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

最近本当に寒くなりました。

テストも近く、受験も近くなってきました。

全国の受験生さん、がんばりましょう。

それでは。

第7話「テント張るのを手伝ってくれ！」

「そろそろテント張る？」

近くを少し散策したり紅葉を楽しんだりしていると日がだんだんと傾き始めた。

「はい、そうしましょう」

「じゃあ、準備しようか」

この山にはキャンプ場がある。そこで自由にテントを張ったり、水道が使えたりするのだ。利用料はまあ、払えないほどではない。

僕は大きなりュックサックからテントの部品を取り出した。軽量型なのでしっかりとした作りではない。雨風をしのげる程度である。

「こんなの簡単だな」

余裕余裕とぶっこいて作業に取りかかった。

「……先輩、もう暗くなってきましたよ」

「……………」

どうやら説明書を家に忘れてきてしまったようだ。かなりきつい。

「手伝いましょうか？」

「うん……………」

紗江ちゃんがばさばさとテントを開こうとする。

「うん……………」

開かないね。

「どうしよう……………」なんとという偶然なことに周りに人がいないし

そういつつづる見渡すとどっかで見えたような人影が一人。

……………もしかして。

「何よ」

声をかけるとやっぱり彼女だった。

「絢辻さん、頼みたいことがあるんだ」

「ん、何？」

彼女はテントを手際よく張っていた。普段見られない私服姿を見るとカノジヨがいてもなんだか……その……うん。

「なんなの？　　というかなんであなたがこんなところにいるのよ？　　ストーリーカー？」

「い……いやまさか……。それでその、テントを張るのを手伝ってほしいんだけど」

「セクハラお断り」

「え？」

何もそんなことを……

……あ。

「ご、ごめんなさい」

彼女もそれに気づいたようで真っ赤な顔であわてて訂正する。

「か、勘違いしてて」

「はははっ、いいよ、別に張ってくれるならそっ」

「先輩！　早くしてください」

うは、本来の目的から外れてしまうところだった。

「はいはい、可愛いカノジヨさんにいいところ見せれないじゃない。私が指示出すからあなたがやって」

「ありがとう、絢辻さん」

絢辻さんを連れて僕は紗江ちゃんの元へと戻った。

第7話「テント張るのを手伝ってくれ！」（後書き）

こんにちは、まなつかです。

いや、まさか前作のアマガミ二時創作（あの七咲のやつ）で絢辻さんの漢字が間違っているとは思いませんでしたよ。
はははっ。

受験生でかなり忙しくなってきました。
クリスマス恒例の小説も連載の用意ができてきました。
12月になってから連載開始予定です。
それでは。

第8話「橘の熱く、譲れない主張」

「……これでいいわね」

「やった！ できたよ！ 紗江ちゃん」
飛び上がるような気持ちだ。

「絢辻先輩、ありがとうございます」

「いえいえ、いいのよ。礼には及ばないわ。さ、もう暗くなったら寝るなりバーベキューでもするなりしたら？」

そう言っつて絢辻さんは自分のテントのある方へと向かっていった。

「じゃあ、僕らはご飯にするか」

「そうですね」

「食材がある……んだよ………ね」

「……ね。」

「ね？」

「あ、あはははは！ どうしてだろう。ないな」

「やばい。冷や汗がこめかみの辺りに浮かぶ。」

このままだと絢辻さんにお世話になることになりそうだ。それだけは避けたい。どんなことを言われるのか……。考えただけで慄然としてしまう。

「……そうだ、アレだ。紗江ちゃんの鞆の中じゃないか！」

「えっ、あ！ そうですね」

彼女はリュックサックをごそそと動かすと中を調べた。

「ありました！ ……カップめんです」

「ははははっ！ よかったよかった」

「……なんでカップめんなんですか？」

「好きだからだよ」

「………そうですね」

彼女は少し残念そうな顔をした。しまった。いろいろ期待させてしまっていたのかもしれない。

……語るか。

「紗江ちゃん！ カップめんを甘く見たらだめだ。そもそもカップめんはインスタントラーメンをどんぶりなしで手軽に食べられるようにと開発されたものなんだ！ 中を見ると面がカップのそこから浮いている！ そこに汗と血と涙の苦勞が染み込んでいるんだ！」

紗江ちゃんはぼかんと口をあけて一瞬時が止まったように固まって動かなかつたが

「ぷっ……くすくす……」

ととうとう失笑してしまった。

「あはは……面白かったかな」

「は、い、え……真面目な顔で語っている先輩を見たら誰でも笑いますよ」

「あははは、真面目な顔だったかあ」

「はい、いつもへらへらしてるのにこういう時と……そのえっちなことを考えているときは」

「あはははは……」

参ったな。

そんなこんなで結局お湯を沸かしてカップめんを二人ですすつたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7174x/>

僕と紗江ちゃんであらぶらぶキャンプ！

2011年12月7日06時51分発行